三浦綾子が描く学校と、
～『泥流地帯』に生きる子どものリアル～

成跳中学高等学校教諭
濱村　愛先生

始業式のあいさつ

私は、東京の私立中高一貫校で国語の教員をしています。

中学校の先生をしいているというと「大変ねえ」と言われるのですが、私自身は毎日非常に楽しく教員生活を送っています。

それは、生徒のおかげです。

私は、担任になると四月の始業式で必ず「何事にも一生懸命取り組むこと。勉強がすべてではない。性格は良く、素直でいてほしい」と話しています。

これまで、中学三年生を何度か卒業させました。一貫校なので卒業させた後も授業を担当しますが、私は中学三年間を特別な期間と考えて接しています。

礼儀や人としての心構えを確固たるものにしてほしいと思っているからです。真剣に取

り組まないなら最初からやらないほうが良い。成績の良し悪しや外見で他人を馬鹿にする人は良い人間関係は築けない。そんな私の言葉に対して気持ちの良い返事が返ってきたら、「返事がいいと幸せがくるよ」と言っています。「返事がいいと幸せがくる」。これは『銃口』の坂部久哉先生の言葉です。

坂部先生は小学校の先生ですが、中学校の教員である私が中学生相手に「返事がいいと幸せがくるよ」と言っても、生徒は非常に嬉しそうな顔をし、「やったー」と言います。

私はそんな素直なところに子どもの魅力を感じています。

私が「何事にも一生懸命に取り組むこと。勉強だけがすべてではない。性格は良く、素直でいてほしい」と考えるようになったのは、これまでの教員経験はもちろん、『泥流地帯』の中のエピソードに影響を受けたからです。

成績を良くするか、性格を良くするか

『泥流地帯』は上富良野の開拓農家の兄弟石村拓一、耕作の生き方と周りとの関わりを描いた小説です。拓一、耕作兄弟は、幼い頃に

父親を喪い、母親とは離れて暮らし、祖父母と姉、妹の六人で決して豊かとはいえない暮らしをしていました。耕作は中学進学を勧められるほど優秀。自身も進学を希望しましたが、中学というのは現代の中学とは程遠く、受験をし、選ばれた人しか行けない学校でお金もかかります。そんな耕作を応援し、家族を支えていた兄の拓一は身を粉にして働きます。耕作は試験に一番で合格しますが、結局家族の生活を思って中学を諦め、高等科に進んで教師を目指します。勉強したくても、成績が良くても、お金がなくて進学できない。耕作が中学を諦めた気持ちを察した石村家にとって幸いなことでした。

耕作は高等科に進み、目標通り小学校の教師となり、家の農作業も手伝います。石村兄弟は決して自分にも他人にも嘘をつくことなく、誠実に、懸命に生きます。

石村家は、祖父母の代から三十年、上富良野の地を開拓するために休まずに働いてきました。やっとその苦労が報われるかと思われた大正十五年、十勝岳大爆発による泥流被害で、石村家をはじめ、上富良野に住む人の多くの命と生活が奪われました。経済的苦労、自然災害、正しく生きているのに報われない

虚しさ。『泥流地帯』を読むと、幸せな生活、真面目な生き方、真実の道とは何なのか、考えさせられます。

耕作が中学を諦めた後、叔父の石村修平がこんなことを言いました。

「耕作、百姓の子に学問は要らんぞ。お前が中学やめて、叔父さんはほっとしたわい。貧乏人には貧乏人の分際ってもんがあっからな」

「俺も、お前に学校に行かれたら、恥ずかしくて、部落の人に顔合わせれねえかった」

「「笑車」」

耕作は叔父の言葉を黙って聞き、何の反応も見せませんが、心の中では、「そうか、百姓の子が学校に行ったら、恥になるのか」と考えます。しかし、耕作は考え直します。

何だか、叔父の修平が間違っているような気がする。

修平の息子の貞吾も娘の加奈江も、成績が余りよくない。そのために叔父は、あんなことをいうのではないかと、耕作は嫌な気がし

た。

（成績が悪くたって、貞吾なんか、親切だからな。それでいいのに）

（「笑車」）

人間が大切にすべきは心です。分かっていても、私たちは数字で判断することがあります。数字によって、学校や社会で合否や順位が決まるから仕方がありません。ただ私は、人との付き合いではそういう判断をしたくないと思っています。そして生徒たちに、「勉強がすべてではない、性格良く、素直で」と言うのは、人間を外面だけで判断せず、真実の良い人間関係を築いてほしいと願う気持ちからです。内面が良い人は、人のために自分の能力を使い、また、それによって今度は人から助けてもらうこともあるでしょう。生徒たちは大変素直に私の思いを受け取ってくれました。手前味噌ですが、私のクラスはお互いを大切にし、一人ぼっちを作らないクラスでした。何かを完成させるとき、一人でも欠席すると「今日はやめよう」と全員揃うことを一番に考えました。子供の素直さに驚きと嬉しさを持った半面、教員としての自分の発言に大きな責任を感じました。

教員が子供たちに与える影響は大いにあります。綾子さんも多くの子供に影響を与えてきた教員だったと私は想像しています。

堀田先生に　憧れた私

堀田（三浦）綾子さんは、十七歳で小学校の教員となりました。敗戦を機に　教員を辞めるまでの七年間を、自伝小説『道ありき』にこう書いています。

七年間の教員生活は、わたしの過去の中で、最も純粋な、そして最も熱心な生活であった。（「はじめに」）

綾子さんは子どもたち五十五人の様子を毎日日記に収めていました。

私が担任したクラスは最大でも三十八人。それでも毎日日記に付けるなど到底できません。綾子さんの熱心さには頭が下がります。

退職後も、教え子たちが療養中に何度もお見舞いに来て、卒業式の日には「仰げば尊し」歌いに来ました。

寝たきりの綾子さんにとって、非常に嬉しい時間でした。綾子さんの小説に出てくる子ど

もたちが素直で、子どもらしいのは、きっと綾子さんの温かい目で見て描かれた子どもだからでしょう。

綾子さんの教員生活の中で、心打たれた話があります。土井芳子という生徒の話です。成績が良く、大人な感情を持っている彼女を、綾子さんは頼もしく思っていました。ある遊びの時間、芳子を中心に四、五人の子が遊んでいると、一人の生徒が「私も加えて」とやってきました。その子は家も貧しく成績も良くない子でした。芳子は、「知らないもん」とそつけなく答え、何度も嘆願するその子を見ようともしません。一緒にいた他の子どもたちも、何も口出しをしません。その様子を見ていた綾子さんは、教室に入って芳子に言います。

「芳子ちゃん、一緒に遊ぶことができないのなら、一緒勉強しなくてもいいんですよ」

わたしのきびしい言葉に、芳子はハッとしたようにうなだれた。

芳子は泣いて謝ったが、わたしは決して許そうとしなかった。この賢い子が、今身に芯みて覚えなければならないことを、わたしは叩

きこんておきたかった。
わたしは、心ひそかに 芳子に 期待していたのてある。
貧しいとか、成績が悪いとかいうことて、人間を差別してはいけないということを、少女のうちに しっかりと胸に刻みこんて欲しかったのてある。
（『道ありき』「はじめに」途中省略あり）

綾子さんは芳子を立たせ、その後三日間、自分の席に着くことを許しませんでした。この話を読み、厳しさに 驚いた一方で、「今ここで身に泌みて覚えなければならないことを、叩きこんでおきたい」という言葉がずしりと心に 残りました。私は、教員は勉強を教えるだけの存在ではいけない、と思っています。それは『泥流地帯』の菊川先生や『銃口』の坂部先生から受けた影響、つまり、綾子さんの影響です。私は、かなり口うるさい教員で、職員室に 入る時にはコートを脱ぐ、机の上に 座らない、人にも のを渡す時は相手に文字が読める方向にして渡す、など、当たり前のことに気がつかない生徒にいちいち注意します。こういう注意をする教員は少ないので、濱村は面倒だ、と言われます。そ

れでも注意し続けるのは、私も綾子さんと同じ思いを持っているからです。
以前、禁止されているスマホで、学校帰りにゲームをしている女子生徒がいました。彼女に注意をすると「もう使いません」と言ってカバンにしまったのですが、電車に乗ると彼女が目の前に座り、ゲームを続けていたのです。相手はゲームに夢中で私の存在に気づいていません。私は彼女を電車からわざわざ降ろし、説教をしました。綾子さんが芳子を三日間席に着かせなかったのと似ているでしょうか。私は、中学生がその場しのぎの対応をして反省もしないことにショックを受けたのです。説教の間、彼女は嫌そうな顔をし、徹底して反抗的な態度を取りました。最終的に、彼女が人目のある駅のホームで「すみませんでした」と頭を深く下げて謝ったので、それ以上続けることなく終えました。
それから一年ほどたった卒業式の日、彼女が泣きながら私のところに来て、謝ったのです。「あの時、自分が悪いとわかっていたけれど、どうしても素直になれなくてあんな態度を取った。でも、ずっと後悔していて先生に謝りたかった」、と。
人を叱るのは、辛いです。できることならし

たくありません。嫌われますから。どうして私ばかり嫌われるようなことをしなければいけないの、と苦しく思います。でも、その生徒に謝られたとき、耕作の祖父市三郎の「苦しいことを通して、神様は何かを教えようとしている」という言葉が頭に浮かびました。

正しければ、厳しくても嫌われない

市三郎は、部落一の物知りとして一目置かれた存在です。だからと言って威張りもせず、助けを求められたらすぐ応じ、非常に冷静です。耕作が深城という市街の高利貸しに、母親のことを罵られたと感じて石を投げたことがありました。石は深城の娘節子に当たってしまい、深城は石村家に怒鳴り込みます。怒鳴り込まれた市三郎は、石を投げた耕作は悪いが、投げるだけの理由があったのだろう、と冷静に話を聞きます。そして、こう言うのです。

「深城さん、水呑み百姓でも、小作でも、人間には変わりはあんめえ」

「わしらの孫らの心に受けた傷は、生涯治ら

んかもしれんてな。顔の傷と心の傷とどっちが大事か、あんたは知らんのか」

（「山合の秋」）

市三郎は相手が悪名高い深城であっても、気後れせずに正しいことをはっきりと言いました。年齢だとか、金持ちだとかは関係ありません。

だから、孫たちにもはっきりとこう言っています。

「金の多い少ないは人間の偉さには関係はねえ。金持ちにも貧乏人にも馬鹿もいれば立派なのもいる。問題は、目に見えるものが問題じゃねえ。目に見えないものが大切じゃ」

（「山合の秋」）

この言葉を、子どもたちも素直に受け入れます。こういう祖父のもとで育った耕作だから、人の本質を見極めて判断する力がついたのでしょう。それは、最初に紹介した「農家の子が中学に進学したら恥ずかしい」と言われた時の考え方からもわかります。

小学校の担任の菊川先生も、耕作の成長に

大きな影響を与えました。菊川先生は師範学校も出ていないし、正教員の資格も持っていません。しかし、生徒たちに 接するときはいつも一生懸命で、「共感をしてくれます。一人ひとりをよく見て、家族のことまで心配してくれます。私は、菊川先生のようにプライベートな話ができるのは、その時代の部落の学校の先生だからだと羨ましく思っていました。しかし、今の中学生も自分のことを知ってもらいたがっていました。私の勤務校では毎学期、個人面談をします。成績の話から始まり、部活、友達、家庭環境、恋愛もジェンダー的な悩みも。それを、生徒からどんどん話してくれます。「へえ、そうなんだ」と言って聞いているだけなのに、もっと話したい、と別の日に職員室に来ます。生徒たちは恐らくそうやって自分を開示して整理し、苦しみ悩みながらも進む道を探しているのでしょう。

自分に気づく、というのは大事です。耕作も自分に 気づくことがありました。耕作は、高等科の担任益垣先生のことをよく思っていませんでした。農家の子の事情をわかってくれない先生が嫌だ。だから、先生の研究授業の時、指名されても「わかりません」と答えま

した。しかし、その研究授業を菊川先生が見ていると知ると、視学に「君の説明は素晴らしかった」と褒められるほどの説明をします。そんな耕作に菊川先生は、厳しく言います。

「耕作、お前、誰のために勉強しているんだ？」

「勉強は義務だ。義務というのはただしい務めということだ。人に役立つためにすべきことなのだ。誰がどうてあっても、やるべきことはやらなきゃならん」

（「日進鳥」）

と厳しく言います。耕作は素直に自分を省みて、自分の誤りに気づきます。信頼している菊川先生の言葉はすっと入ってくるのです。信頼は、一瞬では築けません。経験や考えを共有し、共に過ごしてきた時間が育てるもので、お互いの心の開示が必要です。菊川先生は、いつでも生徒にまっすぐ、格好つけずに自分の気持ちを伝えてきました。手を伸ばした元気な返事を求めたり、農家の耕作に中学進学を勧めたり、農家は一番大事な仕事をしていると教え子たちに言い切ったり。そんな

菊川先生だから、子どもたちは信頼し、また、菊川先生の言葉から自信を与えられるのです。

自分をさらけ出してみる

菊川先生に憧れた耕作は小学校教師となりました。菊川先生に似たまっすぐな教師です。そんな耕作が坂森五郎と関わった時、子どもの素直さを強く感じました。五郎は幼くして母親を亡くし、家事をして家族の生活を助けていました。耕作に対して距離を置いていた五郎が、「まんま」という詩を書いたことがきっかけで、二人の距離は縮まります。

まんま

ゆんべ
おれが　まんまたいた。
ちょっと　こげたけど、
父ちゃん　おこらんかった。
あんちゃんもおこらんかった
みそつけて　くった。
うまかったなあ、
おれのたいた　まんま。

（「桜吹雪」）

耕作は綴り方の授業で、自由に 書いて良いと言いました。難しい凝った表現は必要ない。その人にしか書けない自由で素直な文章は、私も魅力を感じます。五郎の「まんま」はまさに、五郎にしか書けない素直な詩でした。

そして、

「五郎のたいたまんま、先生も食いたかったぞ」と書いた耕作の評も、耕作にしか書けないものだったと思います。この評には続きがあります。

「あのな五郎、先生もな、母ちゃんがいないて育ったんだぞ。そして父ちゃんも死んてるんだぞ。仲よくするべな」

（「桜吹雪」）

耕作も、五郎に 対して自分を開示しました。その気持ちを受け取った五郎が耕作に握り飯を持ってきてくれた時、耕作は涙を流してその握り飯を食べました。いつもうつむき加減で距離を置いていた五郎が、耕作の気持ちを素直に受け止め、それに 懸命に応えようとしたのがわかったからです。

国語の教員をしていると、生徒の文章を読む

機会がたくさんあります。「直接言えないけど聞いてほしいこと」を文章にする生徒もいます。以前、『氷点』の読書感想文に

「自傷行為がやめられない」と書いてきた生徒がいました。腕を切った痛みはなく、それよりも血を見て生きているこ とを実感する、というのです。その子は、陽子と同じように、母親との関係で悩んでいました。気丈に生きる陽子と、母親の機嫌を気にしてしまう自分を比較した作文でした。私は、国語教員としての評と、その子を心配する評の二つを書いて作文を返却しました。担任ではなかったので、担任を飛び越えて面談することはできませんでしたが、心配する評が書かれるとは思っていなかったそうで、その子は私を非常に慕ってくれるようになり、勉強にも学校生活にも一生懸命になりました。そして、「自傷行為をしなくても済むようになった」、と報告に 来てくれました。

子どもが素直に心を開いてくれること、大人の自分を慕ってくれることは、教員としては何にも代えがたい幸せです。ただ、それには自分自身の開示も必要だと思います。

自分を偽って接していたら。人としてではなくただの教員がとして接していたら。相手は

やはりその態度に 気づいて近づかなくなるのだと思います。

嫌われても、
いいことはするもんなんだ！

『泥流地帯』に登場する子どもで私が無視できない人物がいます。それは、井上権太です。権太は耕作の幼馴染です。体調の悪い母親を看病し、家事もし、また、高等科に通うために誰よりも早く家を出ていました。事情を知らない益垣先生は遅刻を叱り、宿題をやってこないことを責め、いというのはダメだって、いつも言うからね。叱られて一人罰掃除を命じますが、それらに対して権太は不満をぶつけるでもなく、自分のやるべきことを淡々とこなしていきます。
耕作が権太の掃除を手伝っていると、級長の若浜は「先生に言ってやるぞ。お前も叱られるぞ」と言います。耕作
「叱られてもいい」と答えますが、内心びくびくです。
幼い頃から褒められ続けてきた耕作にとって、「叱られることは恥」なのです。机の拭き掃除をするとき、耕作は「拭かなくてもわか

らないからやめよう」と権太に提案しますが、権太は「耕ちゃん、わかってもわからんくても、することだけはするべ」とにこっと笑って答えます。「耕作はひどく恥ずかしい気がした」と書かれています。叱られていなくても、恥ずかしく感じたのです。私もこの場面を読むといつも耕作と同じように恥ずかしくなります。

帰り道、権太と耕作はこんな話をします。

「耕ちゃん、お前そんなに叱られるのいやか」

「そりやあいやださ。権ちゃんは平気か、毎日叱られて」

「平気っていうことはないけどさ。だけどねえ、家の父ちゃんは、叱られるからするとか、叱られないからしないというのはダメだって、いつも言うからね。

叱られなくてもやらなきやあならんことはやるもんだって」

権太は学校に遅れるよりも、病気の母親をいたわらないほうが悪いことだとはっきり確信しているのだ。

（叱られても、いいことはするもんなんだ）

耕作は

「叱られたっていい」
と、はっきり口に出して言った。ひどく清々しい心持ちだった。

（「矢車」途中省略あり）

正しさとは何か。それは他人の判断ではなく、自分に問いかけたときに出てくる判断だと思います。私も、楽をしたい、面倒なことには巻き込まれたくない、と思います。電車でゲームをしていても無視すればいいし、作文に自傷行為のことが書かれていても点数だけ書いて評はなくてもいいのです。

しかし、自分に正直に問い掛けると、それらに対して正しい反応をしたいと思うのです。

行為のことが書かれていても点数だけ書いて評はなくてもいいのです。しかし、自分に正直に問いかけると、それらに対して正しい反応をしたいと思うのです。

人は、人との関わり の中で成長するものです。市三郎や菊川先生のような大人と関わった時でも、椎太のように子ども同士でも成長させてくれます。子どもも悩み、苦しみ、考え、世の中を見ています。私が綾子さんの小

説に出てくる子どもに魅力を感じるのは、「成長する力」が見えるからです。

耕作たちの苦しみとは質が違いますが、現代の中学生も苦しんでいます。

なんで私はこんなに苦しいの？

なんで生きなければいけないの？

こういう疑問をぶつけられることがあります。真剣な言い方の時もあれば、軽い言い方の時もあります。私はこの質問に対する明確な答えを持っていません。むしろ、私もそう感じます。でも「そうだよね、苦しいよね」と言って彼らの話を聞くだけで、答えなど出なくても中学生はすっきりして帰っていきます。苦しい時にどう乗り越えるか。その過程も結果も大事です。しかし、素直にその疑問をぶつけられる相手の存在があるだけで、人は孤独を感じずに前に進んでいけるのかもしれません。

いつか、苦しみの先に神様が何を教えようとしているのかを生徒と話して、一緒に考えてみたいです。

「苦しみの中でこそ人生は豊かである、なんて思えたら素敵ね」、と言える教師になりたいと思います。

私は、三浦綾子読書会よりこの『彩果』の著作権をいただいており、２編ほど載せております。
各地で三浦綾子の作品展とうが催されていますが、当法人では、三浦綾子さんの作品を通して人の生き方を真正面から捉えております。
作品は安価です。どうかご購入され、ご自分やご家族様で話題にされてはいかがでしょうか！

一般社団法人
代表　三浦　惣一